

第10回東南アジア分科会 議事録

日時： 2008年10月9日(木) 10時30分～12時

場所： 東京文化財研究所 第一会議室

出席者： 上野邦一、片桐正夫、中川武、桃木至朗(以上、東南アジア分科会委員)、坊城俊成(文化庁参事官室、特別報告)、八木和広、田中健太郎、濱田泰栄(以上、文化庁伝統文化課)、福嶋香代子、守山弘子、橋本奈津子(以上、外務省)、清水真一、二神葉子、友田正彦(以上、東京文化財研究所) 青木繁夫、豊島久乃、田代亜紀子、小角裕子(以上、文化遺産国際協力コンソーシアム)

1. タンロン皇城遺跡保存に関する支援報告

友田正彦 (東京文化財研究所)

報告: 考古支援に関しては、2008年8月にこれまでの遺構分析結果をまとめた報告書をベトナム語に翻訳し、考古学院側に提供している。ベトナムは「ハノイの千年紀」を迎える2010年を目標とし、タンロン皇城遺跡の世界遺産登録を目指して活動している。2008年9月末がユネスコへの申請書案提出期限であったので、7月のベトナム訪問の際にも、世界遺産登録申請案に対してのコメントなど、日本側専門家へ協力要請があった。9月初めには、コーロア保存センターから申請書の英訳草案が送られてきたので、そのうち遺跡に関する記述と価値・評価といった2項目に関して、上野先生、井上先生からコメントをいただき先方へ伝達済みである。

今後の計画として、11月下旬の考古学院主催による「タンロン国際ワークショップ」参加がある。考古学院はベトナム国内、そして日本を含めた7カ国から専門家を招聘すると聞いている。日本からは、国際交流基金の派遣により、上野先生と井上先生に発表頂くことになっている。考古学院側からは、桃木先生にも出席の要請があったが、先生のご都合がつかないため、日本からは、上野先生、井上先生、友田が参加する予定である。また、12月4日から7日までは、第三回ベトナム学国際会議が開催される。この会議には、上野先生、桃木先生、坪井先生が出席されると聞いている。

国会議事堂建て替え範囲の問題については、ベトナムの文化スポーツ観光省の方の情報によると、従前の国会議事堂の敷地から東側と北側(すなわち現在の発掘調査地区内)に20mずつ拡大することで最終決着したとのことである。建替えにともなう大規模な発掘調査が目下行われているが、その詳細についてはベトナム側から全く情報提供がない状況である。

2. フェ・プロジェクト報告

中川武(早稲田大学)

報告: フェで早稲田大学中川研究室が行っている事業を中心に報告する。1991年7月に、ユネスコ日本信託基金事業の一環として、フェ王宮午門修復計画の協議と技術育成セミナーのために、ユネスココンサルタントとして派遣されたのが関わり始めたきっかけ。1994年からは科学研究費補助金により、都城とその周辺の皇帝陵を含めて調査研究をおこなってきた。午門と太和殿は現存するが、勤政殿は基壇しか残っていないことから、ヴェトナム側からその再建についての協力を要請された。この支援のため、実測調査に始まり、技術調査や、比較調査など、都市計画研究室や、ものづくり大学、東京大学等との共同研究も含めて、いろいろなかたちで行っている。科学研究費だけでなく、学術フロンティアや早稲田大学理工学研究所との共同プロジェクトとしてもテーマを分担しながら進めている。現在の科学研究費は2011年まで継続される予定である。大きな目標は、勤政殿を復元することで、そのために必要な資料的、技術的準備を整え、人材も増やしていきたいと思っている。古写真の分析による復元研究や大工技術の復元も大変重要である。王宮の中に静明楼という建物があり、ここにフェ人民委員会と早稲田大学の共同研究室を開設し、そこで研究成果を展示しながらプロジェクトを進めている。

フェは非常に長い時間をかけてできた都で、阮朝は2世紀間だけであるが、ヴェトナムにとって重要な地域である。王宮と皇帝廟があり、明命帝廟の一部はトヨタ財団によって修復された。皇帝廟については、本格的な修復は行われておらず、ヴェトナム側が独自に行っている。午門は傾いていたため、ユネスコの救済キャンペーンが始まり、日本の信託基金により支援された。また、ポーランド、フランスのNGO、ヴェトナムによる修復整備がところどころでおこなわれている。

隆徳殿では、ものづくり大学と共同し、技術移転として伝統的な日本建築の修復方法を、時間をかけて行っている。部材修理は終わり、2009年春頃から再構築を始める段取になっている。ヴェトナム側としては、乾成宮まで(再建)したいとのことだが、これら(の建物)は、復元根拠がないので、調査進行に応じて行ってくださいと伝えているが難しいところである。ある建物は、ベトナム人技術者がついて、フランスの民間会社がお金をだしており、これはフェの中でも非常に難しい建築なので十分慎重に行った方が良く提案したが、修復はあっという間に終わってしまった。終わってしまったものもそれなりに意味はあるが、データが残っていないのは非常に問題ではないかと思う。トヨタ財団が行った明命帝をはじめ、他の皇帝廟も少しずつ全部修復が入っている。経済発展にともなう整備、周期的な洪水による水害への対処も必要となっている。調査では、物差し(尺)が結構残っているので、尺度の復元という研究も行っている。文献に関しては、ヴェトナム側に肝心な中国資料の揃ったものはなく、むしろ日本にあるという状況である。勤政殿については、基壇は精査済みである。

ヴェトナム政府は、ハノイ、ホーチミン、ダナンを中心として、ダナンとフェを結びつけるようなかたちで中部の保存開発を文化事業として行う予定である。王宮だけを保存しても意味がないので、周辺の旧市街地も含めて保存することを提案している。隆徳殿は大変小さなものだが、現在確認

できる最古の木造建築であるため、技術研究としても重要であり、地盤や屋根の復原や補強など様々な研究や工夫が必要である。現状維持、部分解体で済ませることもできたが、きちんとした修復を行うべきであるということで、ベトナム側と日本側が予算・人員を半々で出している。できるだけオリジナルな技術で、古材を残すことを念頭においているのだが、(ベトナム側は)新しくしたほうが良いだろうと考えているので難しい。ベトナムの歴史的建造物については、様式編年も難しいし、技法的な復原もさらに難しい。勤政殿基壇周辺の部分的な試掘だけはようやく許可が下り、発掘が始まり、10分の1の模型を作っている。ようやくデータが整い、10分の1の模型が完成した後、ベトナム政府が勤政殿を手掛けることが可能かもしれないと思っている。コンピュータ・グラフィックも現在作成中である。フエを中心に、北との技術比較や、中部・南部の少数民族との比較もおこなっている。現在 JBIC による水環境の整備調査事業がフエで行われており、世界遺産地区なので、コンサルティングが必要ということからユネスコ経由で早稲田大学が担当している。現在10のガイドラインにまとめている。

3. 伝統的農村集落 ドンラム村に関する保存協力事業報告

坊城俊成(文化庁文化財部参事官室)

報告:文化庁はアジア太平洋地域文化財建造物保存修復事業を、平成2年から行っている。相手国の要請により協力をおこなっており、現在までにネパール、ベトナム、ブータン、インドネシア、韓国で事業をおこなってきた。現在進めているのは、ベトナムのドンラム村、インドネシアのスンバワ王宮、そして韓国である。

ベトナムに関しては、平成3年から14年にかけて日本人町があったとされるホイアンを手掛け成果を挙げており、ホイアンは1999年に世界遺産登録された。ホイアンでは、昭和女子大の友田先生、奈良文化財研究所が、調査・支援を続けている。またドンラム村に関しては林主任調査官と報告者が担当している。現在の事業では、年に1度から2度日本からの専門家を派遣し、ベトナム側から1名程度招聘している。

ドンラム村というのは、ハノイの西50キロぐらいのところにあり、国内最古級の伝統的農村集落である。村の中心には集会所があり、国指定の文化財となっている。支援事業は、平成15年から始められ、平成17年(2005年)11月28日には村落は、国指定保存地域となった。保存範囲は、英雄が誕生した地として祀ってある祠や、重要なお寺がある場所を第一重要地区とし、その周囲を二次的に保存する場所とした二段階の保存範囲である。保存指定内では、2007年頃から、民家や集落に入る門の解体修理あるいは全解体が始まっており、文化庁と奈良文化財研究所の担当者が現地で指導をおこなっている。村落の建造物では、白アリや、湿気の問題があり、修復に新材を使用するか否かで技術者、行政、所有者との間での取り決めの難しさがある。また、ドンラム村も世界遺産を目指す方向で進んでいたが、ホイアンと違いドンラム村は閉鎖的農村集落であるので、観光と文化財保護がなかなか両立し難い状況である。

ドンラン村への支援としては、ドンナム村の技術者を奈良の ACCU で招聘し研修したり、国際シンポジウム「文化遺産保護協力のこれからを考える」というものを昭和女子大で開催したりしている。このような支援により、2007年11月にベトナムの副首相が来日した折に、共同声明にはタンロン遺跡と併せてドンラム村の保存についても明記されたということもある。本年(2008年)は、8月上旬に林主任調査官がドンラム村、フエ省フック・ティック村という伝統的集落を視察した。ベトナム側からは、ドンラム村への継続的支援に加えて、フエ省のフック・ティック集落、南部のカイヘイという集落の支援への要請もでている。ホイアンで築いた実績が、ドンラム村に引き継がれ、さらにドンラム村から南部と中部の村落保存に進んでいけば良いと思っている。しかし、現地集落が変貌していくスピードに追いつくような支援をおこなうには、予算が限られており、継続的に現場を見られるような資金と体制を整える必要がある。

以上